

受難節第2主日礼拝 説教要旨(3月1日)

『神を誇りとする』

ローマの信徒への手紙 5:1-11

早川 真牧師

本日の聖書の言葉に誇りという言葉が三回出てきますが、それらの誇りは普通私たちが誇らないものばかりです。

一つ目は希望です。希望とは未来のものに対するものです。普通人は、今あるものを誇ります。しかし希望はまだ今は手元にはないものに対して持つものです。今は栄光とは程遠い姿であるかもしれない、しかしやがて必ず神は、イエス・キリストに与えられた栄光に与らせてくださる、だから今はまだないがそれを誇ると言っています。

二つ目は苦難です。苦難を誇るの、それが忍耐と練達を経てやがて希望へと至るからです。忍耐とは圧迫される状況の中でじっと耐えることです。練達とは、火で練って不純物を取り除いた金属を表す言葉が使われています。そのようにしてどんな苦難や試練が襲っても最後までなくなる純金のような希望が生まれます。

三つ目は神です。私たちは自分の持っているものを誇ります。しかし時には、自分以外のものを誇ることもあります。私たちは自分に属しているものもしくは自分が属しているものを誇ります。神を誇りとするとは、神に属しているということです。パウロは、キリストとの出会いによる回心の出来事を通して、神との和解を得ました。それは自分に対する誇りが打ち砕かれ、神が誇りとなるという出来事でした。

この受難節、それぞれに苦難の中を通過しておられることと思います。しかし神は真実な方で、どんな苦難の中にあっても神の栄光に至る道を備えてくださっています。そしてその道はキリストがすでに通られた道です。そのことを覚えつつ、先導してくださるキリストと共に神を誇りとして歩んで行きたいと思えます。